空き家バンク制度を利用した就労支援と農村福祉計画

M16HB003 曽根拓哉

1. 困っている人

ほとんどの人にとって労働は、生きていくうえで必要なものである。しかし、勤労収入が必要でも思うように就労できないという人も多く、貧富格差の遠因ともなっている。

(1) 男性(26)

就職活動に失敗してからというもの、大学を卒業してからフリーター生活を送っている。半年前には「この仕事は自分には合わないのではないか」と思うようになりバイトをやめ、色々な仕事を探してみるもなかなか見つからず、家に引きこもりがちな生活が続いた。だが、いよいよ金銭的にも困ってきたのでそろそろ働き口を見つけたいと思っている。

(2)4 人家族

父(36)母(35)長男(5)次男(3)

現在は名古屋の賃貸マンションで暮らしている 4 人家族であるが、次男に持病が発覚したために地方部への移住を検討している。しかし地方にはつてが無く、またどのような仕事があるかということも分からない。次男の通院のために月に一回大学病院に通う必要があるため、都市部からなるべく近い方がよい。

(3)老夫婦

おじいさん(73)おばあさん(69)

現在は大阪に住んでいる老夫婦である。もともと足腰があまり良くなかったが、ここ 2 年前くらいから症状が悪化し、外出できない日が続いている。おばあさんが介護しているが、2 人とも家にこもりがちな日々が続いている。何か、世の役に立つような活動ができないものかと悩んでいる。

2.思いとサポートニーズを支えるサービス

「農村部に移住者を募る地域を作る」ことで、消えつつある日本の農村の振興を試みながら、ライフスタイルの多様性を移住者に感じ取ってもらい、農村であっても集住することで不便を解消していきながら、充実した生活を送ってもらうことを念頭に置く。近年話題となった『里山資本主義-日本の経済は「安心の原理」で動く』にも記されているように、日本各地には様々な資源としての里山が数多くある。発展と消費を繰り返すことが、さも是であるとされる現代社会の在り方に一石を投じる案である。

職住近接、もとい仕事を自分の生活の中に取り入れることで豊かな生活が可能になると考える。自分に本当に適している職業とはどのようなものか、ということを考える期間は、教育を受けた最終年の数か月しかなく案外少ない。農村が持つ魅力を感じ取ってもらいながら、就労支援を行う施設を考えていきたい。

3. 住環境や施設の計画

農村の地場産業として、就労支援に加え 6 次産業化による地域特産品販売の拠点施設を作る。6 産業化とは第 1+2+3 産業、つまり生産と加工と販売を一挙にこなすことである。この 6 次産業化によるメリットは、生産者が市場価格をコントロールできることにあり、真の意味での地域の自立が可能となることである。この施設は空き家バンク制度を利用する。

想定する農村は以下である。

・和歌山県南部の海沿いの農村
・空き家率 50% 人口約 400 人
・大型 SC…車で 40 分　・大阪まで…車で 2 時間
・特産品はみかんと梅

ここに、官公庁と連携して空き家に移住者を招待する。特に若年世代は移住にかかる費用が捻出できないと思われるので、優遇して安く住めるようにする。

地域のメリットとしては、産業が増えることによる雇用の増加、また経済的な成長も見込むことができる。また人口も増加すると、地域が活気づきにぎやかになる。さらに、人口が増えると近くにコンビニエンスストアやスーパーマーケットの建設も考えられるようになり、利便性が高まる。新しい文化の流入もあり、だんだんと面白い地域になることであろう。

また移住者のメリットとしては、地域の目が行き届くということが挙げられるほか、恵まれた住環境に安価で移住できるということがある。知らない土地に移住することは大変であるので、地域と一体になってサポートしていき、安心感を与える。

地元住民は移住者との軋轢が生まれないように、あらかじめどのような人を地域に受け入れるか話し合いで決め、審判することができる。少々排他的であるかもしれないが、後になってトラブルが起きる事を前もって防ぐということに意義がある。

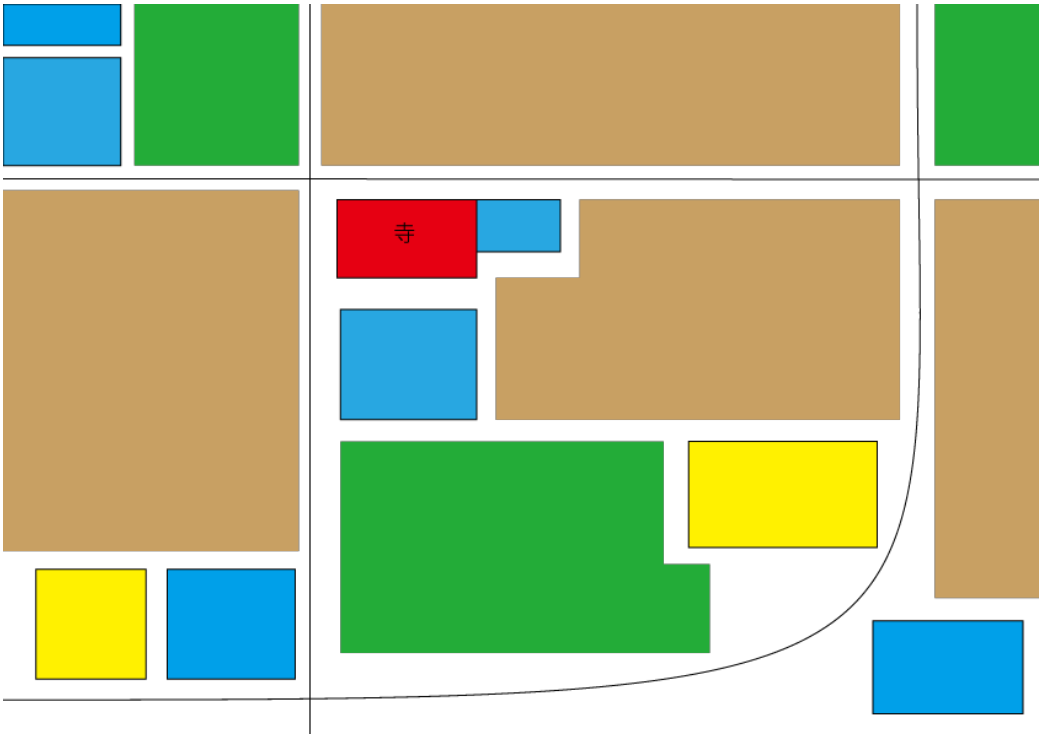
地元の NPO 法人が中心となって動き、農村での就労を斡旋する。移住者には農業や食品加工の方法を教えていく。耕作放棄地も安価で貸し出している。大切なことは一人一人に、仕事を与える、ということである(もちろん、強制ではない)。簡単なことでもいいので仕事を与えていくことは使命感の付与につながり、報酬を付与することで満足感、社会参加の意識を与えることができる。例えば、足腰の弱いおじいさんにはパッケージに絵を描く作業を行ってもらう。このように、施設に来る人に労働本来がもつ魅力を伝えていく。

拠点施設は数年前から無人になっている寺院の住居部分に施設を考える。地域の中心は昔から神社仏閣であったので、これを利用していきたい。この施設は福祉施設と販売拠点の両方の顔をもち、そのメリットは障害を抱えていても、近くにサポーターの存在があることで、安心して労働できるということにある。

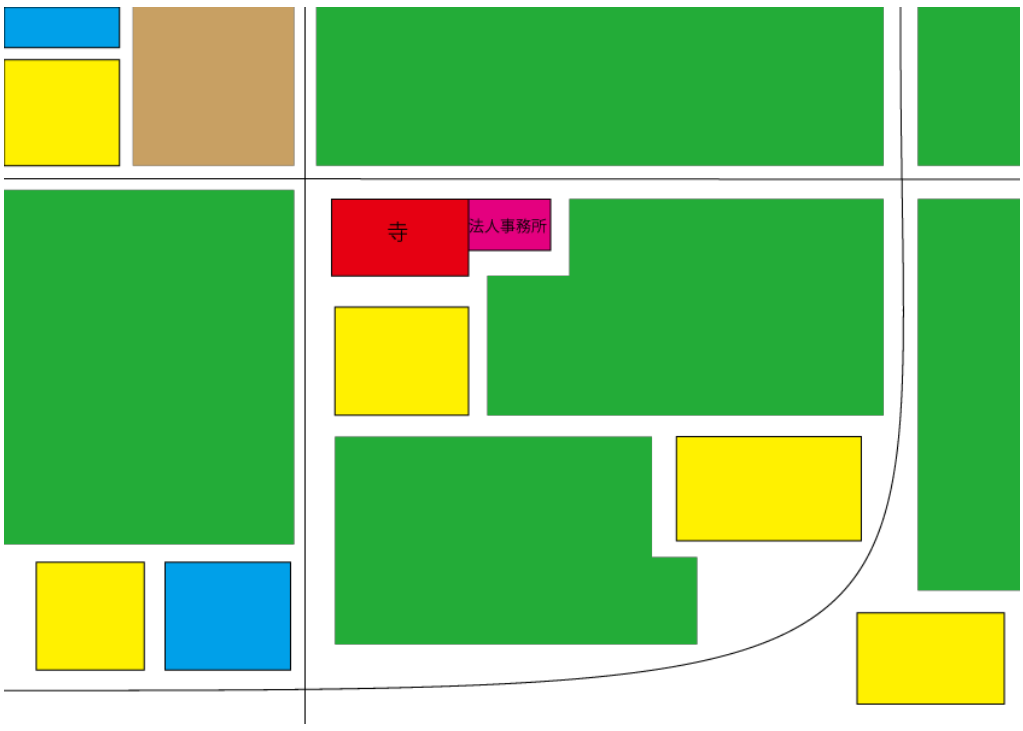
販売・加工拠点としての機能は、土間に収穫した農作物を運び込み、台所で食品加工を行う。パッケージに入れた商品を隣の作業場でラベル張り、梱包をする。毎朝とれたての農作物と加工食品を、交代で大阪や名古屋のレストラン・スーパーマーケットに売りに行く。施

設内にはリラクゼーションスペースを設ける。地域住民は誰でもここで休むことができる。

<Before>



<After>



水色=空き家,黄=居住住宅,茶=耕作放棄地,緑=耕作地

4.イメージ図

移住者と住民が交代で毎朝、とれたての野菜を
大阪のレストランに運びに行く
新鮮な野菜が美味しいと評判は上々だ

農業の指導を行っている
後継者不足に悩んでいた農家も一安心である

パソコンに詳しい若者は
インターネット販売を担当している
村の重要な収入源となっている

天気が良い日には皆でバーベキュー
花火も楽しむ

<参考>

・シラサギデイサービスセンター(熊本県八代市)

http://www.sirasagi-kaigo.com/cn81/pg603.html (Accessed 2016-07-29)

・里山資本主義-日本の経済は「安心の原理」で動く-藻谷浩介,NHK 広島取材班

・限界集落株式会社-黒野伸一